日本における食料消費構造の変化に関する分析

【目次】

第１章　問題意識と研究目的
第２章　食料消費の動向
　第１節　国民１人１年当たり食品別の消費量の推移
　第２節　食料費に対する穀類の割合
　第３節　供給熱量比率の推移
　第４節　日本の自給率と国民１人１年当たり食品別の輸入量の推移
　第５節　食料消費動向の結果
第３章　食料費支出の変化の分析
　第１節　食料消費の変化の要因
　第２節　食料費支出と所得水準の関係分析
第４章　食生活の変化の分析
　第１節　飽和水準・変動係数の分析方法
　第２節　食品別の飽和水準と変動係数の推移
　第３節　食生活の変化の分析結果
第５章　要約と結論
参考文献

【目的】

日本の食生活は大きく変化してきた。もともと日本人の「食」は、伝統的食生活パターンである米を中心とした、「日本型食生活」であった。「日本型食生活」とは、主食である米を中心として畜産物や果実などがバランスよく加わった健康的で豊かな食生活である。しかし、食料消費構造の変化により、食生活の洋風化へと変化している。そこで、本論文の目的は、日本の食料消費構造の変化を定量的に分析する。具体的には、日本の食料消費の動向を把握した上で、食料費支出の変化や消費者の嗜好の変化について実証的に明らかにする。

【方法】

第１に各統計資料等のデータを利用して、食料消費の動向を明らかにする。第２にローレンツ曲線、ジニ係数を用いて所得水準と食料消費支出の関係を分析する。第３に飽和水準、変動係数を用いて食料に対する消費者の嗜好の変化を分析する。

【結論】

本論文の結論は次の２点である。第１は、所得水準と食料費支出の関係分析により、食料消費構造の変化が日本全体に広がっていると予想される点である。昭和44年から平成16年にかけて、所得階層間での食料費支出の格差が小さくなっていることから、食料消費構造の変化が所得水準に関係なく日本全般に広まったと考えられる。第２は、食生活の変化の分析により、日本人の食生活が洋風化へと進んでいるが、限りなく進んでいるのではなく、近年においては食生活の洋風化の進行は停滞しているという点である。食品の賞味期限改ざんや食中毒などの問題がニュースになり、消費者は食生活に対して非常に敏感に反応している。また、メタボリック症候群などが話題になったことで消費者の健康志向が高まり、例えば米については雑穀米や五穀米など注目が集まっているというニュースも流れている。近年の食の安全性の高まりや消費者の健康志向が、食生活の洋風化の進行を停滞させた要因と考えられる。

日本の食生活は、食料消費構造の変化によって、食生活の洋風化が日本全体的に広まった。しかし、近年では食の安全性や消費者の健康志向により、日本型食生活が見直され、食生活の洋風化の進行が停滞していることが明らかとなった。今後日本の食生活は、食の安全性や消費者の健康志向の意識が更に高まり、一時衰退していった米中心の「日本型食生活」に近づいていくことが考えられる。

【参考文献】

[１]　石橋喜美子『家計における食料消費構造の解明－年齢階層別および世帯類型別アプローチによる－』農林統計局，2006年.
[２]　食料白書『食料消費構造の変化』食料・農業政策研究センター，1996年.
[３]　加藤 譲『食品産業経済論』農林統計協会，1990年.
[４]　堤　伸子「食料消費量の飽和水準について」『日本家政学会誌』Vol.44 No.7, 1996年, pp.535-540.